

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



三浦勝雄さん
昭和4年5月1日生まれ。
東土幌在住

私の生い立ちと

北糖農場

私

は昭和4年宮城県石森町（現在の登米市）で生まれました。私が生まれて百日経った頃、事業に失敗した父は、「新天地で一旗揚げよう」と、知り合いを頼って北海道の現在地に來ました。

当時この地帯は北糖農場の所有地で、両親は小作人として入植。約10町歩の畑は、やち坊主のひどい湿地帯で、20斤の豆を小作料として納めるのも大変だったと聞いています。家は掘立柱で土台もなく、草屋根とえん麦の壁で、二間の床にわらを敷いて寝起きしていました。すぐ隣には馬が寝ていて、時々壁から顔を出していたのを覚えています。

お米の弁当の思い出

小

学生の頃、母はいつも麦入りごはんの白米部分を選んで弁当に詰めてくれました。おかずはなく、塩を加えて何倍にも薄めたしょうゆを塗っただけのごはんでしたが、とてもいい香りがしました。着ている服はボロでも、食べ物には不自由しませんでした。

農地改革と冷害、 土地改良事業へ

昭

和22年、戦後の農地改革によって、この地域の小作人は15町歩の農地を持つ自作農になりました。

しかし、自分の土地とはいえ相変わらずの湿地で、青年団などが協力し合いながら共同で排水作業を行いました。この対策として昭和40年代から補助事業が急速に進み、土地改良区に掛け合って暗渠や明渠事業が実施されるようになり、ようやく農地として食糧生産ができるようになり、恵まれた地域になりました。

農協組合長時代に 病に倒れて

平

成4年、縁あって音更町農業協同組合の組合長の職に就きました。若い頃から体は丈夫なほうだと思っていましたが、任期半ば、65歳の時に脳梗塞で倒れ、入院生活は比較的軽くても、責任ある職を続けることは無理だと思いつめた。多くの人の励ましと支えもあり、その後も数年間職務を全うすることができました。周囲の皆さんには感謝の思いでいっぱいです。

地域念願の水道整備

こ

の地域は昔から井戸水で生活していましたが、決しておいしい水とは言えず大変苦労しました。自分が元気なうちに何とか水道整備を願い、関係機関へ働きかけ続けた結果、昨年秋季に念願かない簡易水道が整備されました。ようやく真冬でも温かいお湯で顔を洗えると、妻と一緒に喜び合いました。

先輩からの教え

昔

から曲がったことが大嫌いで頑固な私ですが、多くの人々に教えられ助けられてきた人生です。

生まれ育ちも違う人々が集まる中では、一人ひとりの知恵を出し合い、話し合っつて一致点を決め、その決定に従って行動すること。これは先輩からの教えです。

「錦」地域は、最盛期に20戸以上あった農家が5戸に減り寂しさを感じることもあります。しかし、作物が取れず貧しかった頃に「ボロは着ていても心は錦」と、みんな夢見て名付けた思いを忘れずに、愛着あるこの地で暮らしていきたいと願っています。



地域の人たちが集う「錦会館」